

4. 健康チェックと管理

猫、特に子猫は感染症にかかりやすく健康管理が非常に難しく、どこの施設でも苦労されています。施設の設備が十分でない、感染症予防のための予算がない、人員不足等、厳しい環境にある所も多いですが、ぜひ、さまざまな工夫をして、出来るところから対策を始めてみましょう。

愛知県岡崎市動物総合センターAnimoの取り組み

愛知県岡崎市動物総合センター「Animo」が行っている収容猫の飼育管理の方法をご紹介します。この施設では、以前にパルボウイルスによる感染の拡大が発生した反省を踏まえて、シェルターメディシンの専門家(14ページ参照)に相談し、管理の方法、ワクチン接種計画、消毒や清掃の方法などを改善しています。

成猫の選定・飼育管理フローチャート

初日(1日目) 引き取った**当日**に、引き取った獣医師または報告を受けた獣医師が必ず**今後のことを判断する**。

センター引き取り(引取り調査票に従い、できるだけ多くの情報を得る)
成ねこの選定基準に従った**外部望診**(外部寄生虫等が確認されたら駆除)、
健康状態検査、性質判断

適性有

保留

適性無

初回コアワクチン接種
駆虫(イベルメクチン注射)

ねこ室上段 または
車寄せ

ねこ室 下段へ

検疫室(B)へ

検便(陽性の場合は速やかに駆除)
ウイルス検査(ネコエイズ・ネコ白血病ウイルス)
一般血液検査

3日間で
その後のことを判断

- ・性格上、譲渡の適性のないもの
- ・年齢や病気により、譲渡の適性のないもの

4日後(4日目)

適性有

検便(浮遊法)後、

飼育室へ

避妊去勢手術(ワクチン接種から1週間後以降)
検便(浮遊法)およびマイクロチップ埋め込み(抜糸時)

飼育室または展示室へ

この間、人(スタッフ)ともふれあい、社会性を身につけさせるよう努力する。この間に元気消失、下痢、嘔吐の症状が出れば、検査・治療し、何らかの疾患が発見された場合には適切な処置を施し、家族希望者に説明できるようにする。

候補猫として公示

譲渡前にシャンプー・グルーミング等の実施
譲渡後様子をみて、混合ワクチン接種を飼い主で行うよう指導。
(予防歴と今後のスケジュール表を渡す)



子猫の選定・飼育管理フローチャート

初日（1日目） 引き取った当日に、引き取った獣医師または報告を受けた獣医師が必ず今後のことを判断する。

センター引き取り（引取り調査票に従い、できるだけ多くの情報を得る）
子ねこの選定基準に従った外部望診（外部寄生虫等が確認されたら駆除）、
健康状態検査、性質判断（必ず持ち込まれた群ごとで判断を行う）



適性有

検便（浮遊法）

保留

ねこ室 上段へ

適性無

ねこ室 下段へ

**犬歯
出ている
(4週齢以上)**

**犬歯
出していない
(4週齢未満)**

パルボチェック

3日間で
その後のことを判断

・週齢が若く育たないと思われるもの
（目が開いてないものは翌日、
衰弱し授乳が困難なものは数
日後に安楽死または処分依頼）
・風邪の症状が出ているもの

初回コアワクチン接種後、

検疫室（B）へ

駆虫（イベルメクチン
注射にて疥癬・回虫等）

パルボ陰性へ

検疫室（A）へ

駆虫（イベルメクチン注
射にて疥癬・回虫等）

犬歯が出始めた時点で初
回コアワクチン接種し、

検疫室（B）へ

パルボ陽性

即日、処分依頼また
はセンターにて安楽
死



体重500g…検便（浮遊法）
体重600g…検便（浮遊法） ・ 2回目コアワクチン接種（1回目から2週間後以降）
2回目コアワクチン接種から4日後…検便（浮遊法）およびマイクロチップ埋め込み
※検便（+）なら（回虫・コクシジウム等）随時駆虫

飼育室 または 展示室へ

この間、子猫同士遊ばせ（同室生活も可）、人（スタッフ）ともふれあい、社会性を身につけさせるよう努力する。この間に元気消失、下痢、嘔吐の症状が出れば、検査・治療し、何らかの疾患が発見された場合には適切な処置を施し、家族希望者に説明できるようにする。



適性ありと診断

候補猫として公示

譲渡前にシャンプー・グルーミング等の実施
3回目混合ワクチン、避妊・去勢手術の済んでいない場合は、飼い主で行うよう指導。
（予防歴と今後のスケジュール表を渡す）



日常の消毒

■ ケージおよび部屋の清掃・消毒



①雑巾やブラシで汚れを十分に落とす



②次亜塩素系消毒剤噴霧後、10分以上置いてから、よく拭き取る



◎毎日の清掃・消毒の他に、月1回、各部屋の徹底消毒（室内全域に噴霧器（噴煙器）で次亜塩素系消毒剤を噴霧）を実施する

■ 食器やトイレの消毒



- ①スポンジやブラシで汚れを十分に落とす
- ②次亜塩素系消毒剤液（100倍希釈以上の濃度）に10分以上浸ける（常温：理想は20℃）

■ 清掃時の注意



部屋ごとに、上着・手袋・靴を替える
またケージごとに手袋を替える



病気発生時の消毒

■ コクシジウム発生時

■ ケージおよび部屋の清掃・消毒

- ①雑巾やブラシで汚れを十分に落とす
- ②次亜塩素系消毒剤噴霧後、10分以上置いてから、よく拭き取る

■ 食器やトイレの消毒

- ①スポンジやブラシで汚れを十分に落とす
コクシジウムの発生しているケージのトイレは、一日一回砂をすべて換え、消毒
- ②次亜塩素系消毒剤液に浸ける（常温）または噴霧後、10分以上置いてから、よく洗い流す
- ③殺オーシスト消毒薬液（100倍希釈）（常温）に（全体が浸かるように）24時間以上浸けた後よく洗い流す

■ パルボ発生時

■ ケージおよび部屋の清掃・消毒

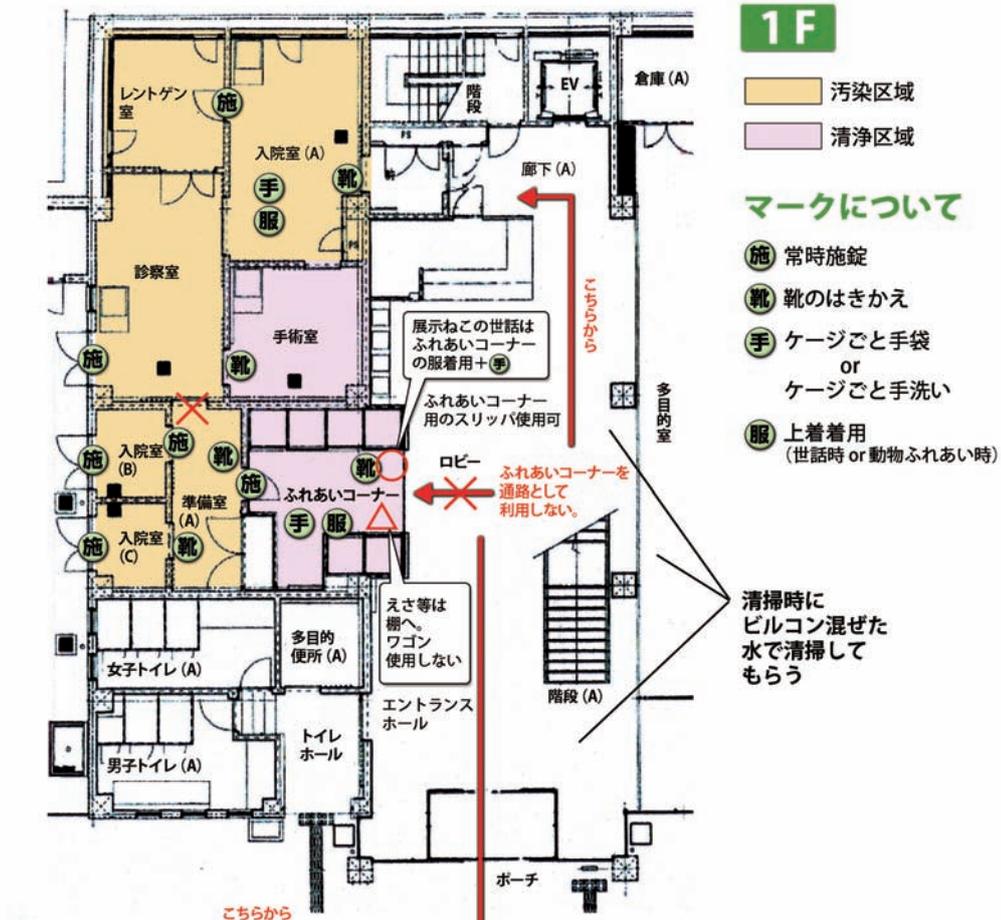
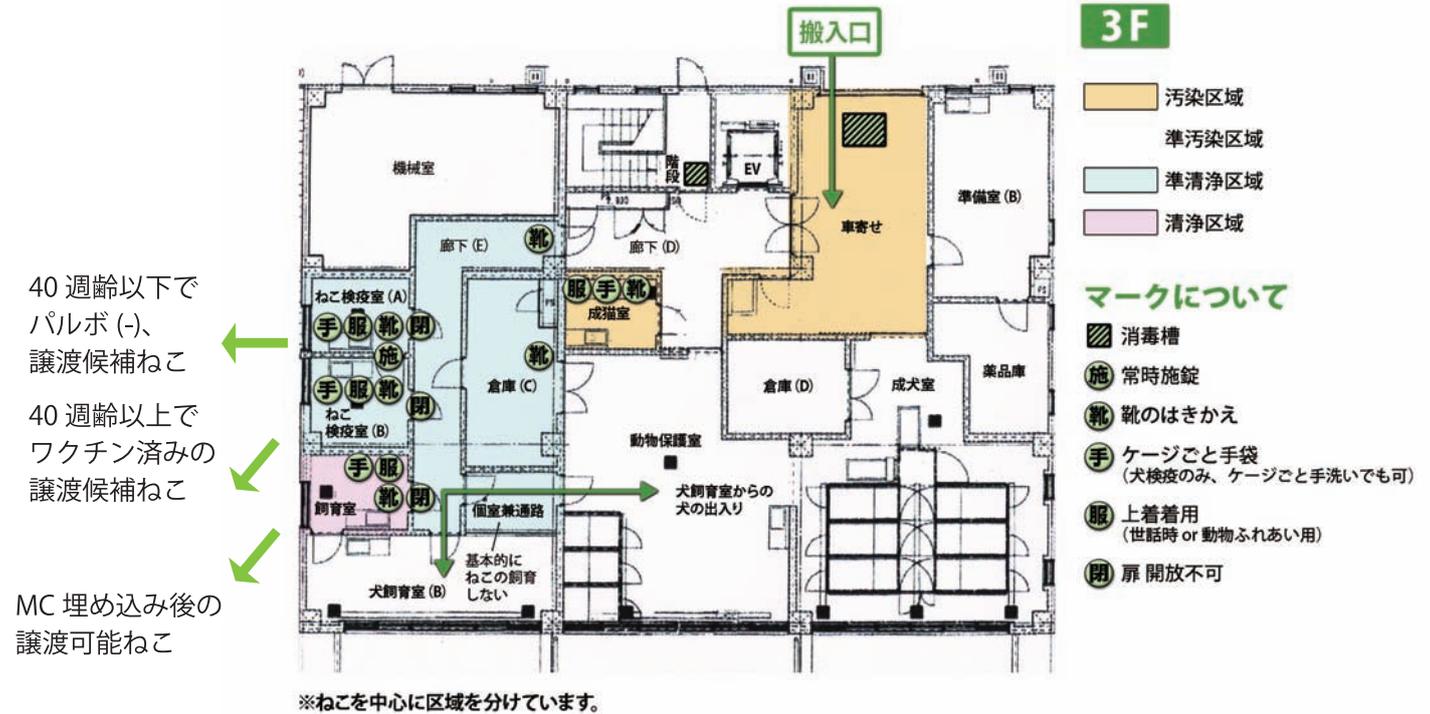
- ①汚染された可能性のある物品は破棄、すべてのケージ内外をよく洗浄
- ②当日に室内全域に噴霧器（噴煙器）で次亜塩素系消毒剤を噴霧
当日に不可能な場合は、ケージ・壁など全体に次亜塩素系消毒剤噴霧しておき、翌日室内全域に噴霧器（噴煙器）室内全面噴霧

■ 食器やトイレの消毒

- ①スポンジやブラシで汚れを十分に落とす
- ②次亜塩素系消毒剤液に10分以上浸ける（常温）

Animo 施設内の感染症予防管理 MAP

全職員にわかりやすいように施設 MAP を色分けし、靴・上着の替え場所などを示しています。



「シェルターメディシン」という考え方

アメリカには、行き場を失った動物たちを收容する施設（シェルター）が、行政・民間あわせて、数多く存在します。2000年にはアメリカでも動物愛護法が改正され、殺処分を減らし譲渡が促進されるようになったことを受けて、動物をシェルター内に一時的にでも多数收容しなければならない状況になりました。

そこで、動物の健康を阻害することなく、心身ともに譲渡に適した状態で動物を一時的に多数收容するために、收容した犬や猫を適切に管理することの重要性が注目され、発展してきたのが「シェルターメディシン」という新しい獣医医療です。

一般の小動物の臨床管理と異なるのは、收容されている動物たちを「群」として捉え、その健康を管理するという点で、「伴侶動物の群管理」と定義されます。最大の目的は「群の健康を維持し、心身ともに健康な動物を一頭でも多く譲渡すること」。シェルターで発生しうる感染症を予防し、発生時には実証をもとにした有効な手段をうつ。また收容されている動物のストレスを減らす（＝ストレスが減れば病気や問題行動の発生が減少する）。こうした点において獣医学的な研究が行われ、その実証のもと、数多くのシェルターの環境やしぐみが改善され、收容された動物のストレスの軽減や処分率の低下、譲渡率の上昇が見られています。

この「シェルターメディシン」という考え方は、日本には平成22年から、田中垂紀獣医師（現在カリフォルニア大学デイビス校でシェルターメディシン研究に従事）によって紹介されており、アドバイスを受け入れて、それまでの管理方法を見直す自治体やセンターも増えています（前述の岡崎市Animoなど）。

日本とアメリカでは、施設のシステムや環境も異なりますし、アメリカでもシェルターのシステムは確立しているものの、全国規模で見るといまだに処分率は日本同様に高いのが現状ですが、獣医学的検知に基づいた「シェルターメディシン」という考え方や手法は、パルボなど感染症への対処に悩んでいる自治体には参考になるのではないのでしょうか。

シェルターメディシンで提唱されている「猫」の感染症予防のための管理のポイント

■ 猫の要注意感染症

FVR～結膜炎、鼻水、くしゃみ、よだれ、口内炎
猫汎白血球減少症（FPV）～下痢、嘔吐、突然死
真菌症～円形脱毛（人にもうつる）

① ワクチン接種計画

* ワクチン接種でかなり効果的に防御できる疾患は、猫の場合は「FPV」

（幼猫では接種後数時間、成猫でも48時間以内に疾患防御可能。但し、シェルター内は様々なストレスがあるため正常な防御機構が成立しない場合もあり、ワクチン接種でも発症することもある。）

* 3種混合の生ワクチンを接種

* 接種時期は、シェルターに入る前（搬入の車の中、玄関先など）あるいは、入った直後

* 幼齢猫の場合、2週齢未満には接種しない。4週齢から2週間ごと16週齢まで接種

* 負傷動物や罹患動物に対しても、譲渡対象と思われる場合は速やかに接種（群を守るため）

②病原体の量を減らして疾患予防

*シェルター内で病原体を完全に排除することは不可能だが、動物が病原体になるべく曝露されない環境を作ることが大事。そのためには、病原体がどのような経路で入ってくる可能性があるか各シェルターで確認することが重要。

◆病原体の侵入経路

- 新しく入ってきた動物
- キャリーケース、リード、ベッド、ブランケット
- ひと（手、衣類、人が持ち歩くボールペンなども感染源になる。部屋ごとに白衣を替えるなど要注意）

◆有効な消毒方法のポイント

- 消毒薬の選択～ビルコン、塩素などが有効（アルコール、第4級アンモニウム製剤、クロロヘキシジンはパルボには完全な効力はない）
- 移動ケージ、キャリアなど紫外線消毒できるものは天日干し（パルボ、カリシには効果的）
- 効果がない理由
 - ～濃度が間違っている
 - 塩素はシェルターでは32倍希釈が基本
 - ～接触時間の不足
 - 最低10分間。感染大爆発時はより長く（～24時間）
 - ～使い方を間違っている
 - 残留洗剤で効果が減弱（逆性、塩素、クロロヘキシジン）
 - 有機物があると消毒効力が激減するため（特に塩素）、必ず有機物は全て取り除いてから消毒薬を適用
 - ～乾燥しきれていない
 - 掃除したあとに完全に乾燥できないと病原体は増殖する

◆清掃方法

- 清掃順序～群ごとに白衣・手袋を替えるのはもちろん、作業順序にも配慮する（子猫→健康な成猫→野良猫→収容されたばかりの猫→検疫中の猫→罹患猫）
- ケージの移動は避ける（ケージの移動で80%の猫がヘルペスウイルス排泄の可能性あり）
- ワクチン接種済で疾患症状を出していなく健康な猫については、スポットクリーニング（汚れたところだけ清掃すること）も猫のストレスを軽減するのに効果的

③栄養管理

*収容後3日間の食欲がその後の疾患発生に関与するため、初期の栄養管理は特に重要

- 嗜好性の良い食事（缶詰、温めるなど）

④ストレスを考慮した収容環境

*収容環境が猫のストレスに著しく影響を及ぼすため、短期収容（2週間まで）と長期収容（2週間以上）とにわけて考慮した環境を作る。

1. ご飯とトイレと寝床（ベッド）を50cm以上離す
2. 必ず隠れ場所を提供する（段ボール、紙袋、ケージが狭ければケージをタオル等で被う）。
3. 段差を提供する（戸棚を付ける、段ボールの上にベッド等）
4. 長期収容には、より大きなスペースが必要で、人との触れ合いや運動、遊びも必要になる。

⑤群管理を適切に行えば、それだけ一頭へのケアも行き届くことになり、群管理が向上すれば個体の健康も向上するという概念の基に行うのがシェルターメディスンである。